

---

# 気がつけば生徒会役員？

あどほっく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気がつけば生徒会役員？

### 【Nコード】

N8230F

### 【作者名】

あどほっく

### 【あらすじ】

私立桜花高校に入学した一夜は、ちょっとしたことで生徒会に入るはめになってしまった。基本的には、ほのぼの路線でやっていきたいと思っています。

## 第一話 事のはじまり1（前書き）

初めまして、アドホックと申します。

小説を書くのが初めてですので、誤字脱字、改行等至らない点が多々あるかと思いますが、生暖かい眼で読んでいただけると幸いです。

## 第一話 事のはじまり1

「ようこそ、桜花高校生徒会へ。」

そう生徒会役員に言われた僕は、その日初めて、後悔先に先に立たずという言葉の意味を経験することになったのだった。

桜が散りはじめた4月7日、僕は高校生になった。

私立桜花高校という自転車で20分くらいの所にある高校だ。この高校を受けるまでに家族会議が行われたりすったもんだと色々あったのだが、

ここでは割愛しておこう。

一通り準備を終えた僕は、学校に向かった。高校の合格通知は封書で来たために、誰が受かったとかどんなクラスかなんかは学校に行ってみなきゃわからない。

「どんなクラスかな？かわいい子が居れば良いな。」

現実がそんなに、都合のいいもんじゃないことは知っているつもりだったが、やはりかわいい女の子と仲良くしたいと期待に胸を膨らますのは、男として当然のことだと思う。

幸か不幸か、その期待はかなうのだが・・・

「えつとく、クラスは？ っと、あった。 6組か・・・誰が同じクラスかな？」

とクラスメイトを確認していた僕の頭を、後ろから叩く男が

『ボコッ』

「イッてえ〜。」

遠慮なしに叩かれた頭をさすりながら叩いた男を睨むと、その男は



僕は西野の前の席に座り、二人で談笑していた。しばらくすると、一人の長身のメガネが僕に向かって話しかけてきた。

「あの、そこ、俺の席なんだが・・・。」

言われて、僕はその席を立ち、謝った。

「すまん、悪かった。」

「いや、まあ、この雰囲気じゃ、お前さんたちがそうなんのもわかるし、気にする事ないさ。」

メガネは、苦笑しながらそう言うと、僕が先ほどまで座っていた席についた。

僕は、その見た目で判断しないところが気に入ったので、彼と友達になろうと思いい、再び話かけた。

「僕は、東一夜あさまかすや、良かったら友達になつてくれないか？」

「急やな、まあいいけど。俺は南部悠介なんぶゆうすけ。よろしく。」

さっきと同じような苦笑いを浮かべながらも彼は、自己紹介を返してくれた。

僕は、まあ何とかこのクラスでやって行けそうな気がした。

その後、南部と西野も互いに自己紹介をして、二人が三人になった後も談笑を続けていると、

クラスの担任つばいスーツの女が、教室にやってきた。

女は黒板の前に立つなり、

「お前ら、廊下に並べ。入学式に行くぞ。」

と、言うだけ言って、廊下に出て行ってしまった。

仕方がないので僕らも廊下に出て彼女の言うとおりに並ぶことになった。

廊下から講堂に向かうとすでに他のクラスは席についており、残り僕らのクラスだけのようであった。

僕らが席に着くと入学式が始まった。校長の形式ばった挨拶にミリグラムも興味がなかった僕は、

そのまま式の終りまで、夢の世界へ旅立つのだった。

・・・生徒会メンバーの紹介を聞いていれば、こんな目に逢うこと  
もなかったというのに。

## 第二話 事のはじまり2

式が終わると僕らは教室に戻る事となった。

入学式のあと、教室に戻り行われることと言えば、いわゆるお約束・

・

そう、担任発表と自己紹介、そして学級委員決めである。

先ほど壇上に立った女教師は、チョークで黒板に達筆な文字を書く  
と振り返った。

「この、クラスの担任をすることとなった、北条美奈穂<sup>ほつじょうみなほ</sup>だ。担当教  
科は英語、何か質問のあるやつはいるか？」

「先生、いくつなんですか？」

そう調子に乗ったバカが、くだらない質問をしているが、彼女は別  
段気にした様子もない。

「28だ。他に質問は？」

なるほど、黒板に書かれた文字に齒に衣を着せぬ物言い、そしてメ  
ガネの奥に見えるキツめな瞳から察するに、彼女はきつと豪胆<sup>こつたん</sup>な性  
格のdarou。中々面白い先生のようにだ。

続けて彼女は、僕らに自己紹介をするよう促す。

「それでは、今から自己紹介をやってもらう。先に言っておくがお  
前らに拒否権はない。では、まず東から。」

いつもにことだが、こういう時自分の名字が疎ましく思う。なぜヒ  
ガシではなかったのdarou。

そんなことを考えても仕方がないし、逆に最初に済ませていただければいいや。

そう気を取り直した僕は、席を立ち自己紹介を始めた。

「東一夜です。中学では水泳をやっていました。これから一年間よろしくお願いします。」

当たり障りのない挨拶を済ませた僕は、クラスメイトの自己紹介をさして興味も示さずに聞いていた。

しばらく進み、南部と西野の紹介も終わった。もう聞く事も無いかなと思っていた僕は  
その子に釘付けとなった。

「初めまして、水瀬沙希みなせさきと言います。皆さんよろしくお願いします。」

その子の声はとても澄んでいて、艶やかな黒髪と、はにかんだ笑顔がとても印象的だった。

僕が登校途中に冗談半分に願っていたことは、叶ってしまったのだ。かといって積極的に仲良くなるうとするほど、僕はポジティブな人間ではなかったが・・・

まあ、クラスに華があることは良いことだ程度にしか考えてなかった。

もっとも、クラスの男子どもは、その子の紹介が終わると発狂気味に叫んでいたが・・・

鬱陶しかつただけなので割愛する。

自己紹介も終わり、これで解散かと思っていると北条女史は、今

思い出したという感じで教卓に立つと喋りだした。

「すまん、学級委員の選出を忘れていた。誰かやりたい奴はいるか？」

彼女は、教室を見渡すが案の定手を挙げるやつはいなかった。

「では、こちらで勝手に決めさせて貰うが良いな。」

そう言うと彼女は、一瞬目を瞑り、名簿を覗いた（のぞいた）後に

「では、火野麗華ひのれいかに頼むとしよう。火野、良いな？」

「ハイ。」

「よし、じゃあお前は今日から学級委員だ、皆も火野の指示に従うように。以上、今日は解散。」

言うべきことを済ますと彼女は教室から出て行ってしまった。

僕は鞆を持ち、南部と西野の所に向かった。

「親睦しんぼくを深めるってことで、マックでもいかない？」

二人とも頷いたので、僕らはマックに向かうことにした。

まあこんな感じで僕の高校生活は幕を開けることとなった。

### 第三話 事のはじまり3

「で、あるからして、ここの文章は前の文章の末尾にかかっているわけでありませう。」

黒板のまえで、老教師が国語の授業をしている。まだ、最初の方なので退屈である。

暇すぎた僕は、今日までのことを思い返してみた。

あれから一週間が経った。連絡事項があったとすれば、北条女史から部活についての説明があったくらいだ。

それによると、うち高校は文科系クラブと体育系クラブ、そして生徒会が存在することだ。

まあ別に強制的に入部する必要はないが、どこかに入っておいて損はないあるとおっしゃっていた。

北条女史らしいなと心の中で思ったのは、きっと僕だけではない。

あとは、席替えがあつて、僕は窓側、後ろから三番目というそれなりのポジションをゲットできたが、

隣に学級委員の火野さんがやってきたは計算外だった。

彼女は、160cmくらいで、いつも長い髪を二つに括つて（くくつて）いる。

俗に言うツインテールつてやつだ。

責任感は強いみたいで、水瀬さんに男子が集まって揉みくちななつたときに

男子達に向つて、すごい剣幕けんまくで怒っていた。

なんか、責任感だけでなく気まで強そうな感じである。

クラス統一という意味では、北条女史の指名は的確だったのだろう。また誰にでも平等みたいで、西野にも普通に話しかけ普通に注意していた。

そういう部分は、少し好感が持てる。

そんな彼女が隣に居るといっなのは、若干居心地が悪い。

まあ、なにもしなければ向こうも注意してこないし、普通に挨拶する分は問題ない。

さらに、水瀬さんには劣るが、彼女も十分美人である。

一週間で挨拶する程度の仲にはなった。

一週間で挨拶程度の仲を喜ぶべきか悲しむべきか悩むところだが……。

その他は特に変わりなく、クラスも相変わらずな感じで、水瀬さんは男子から大人気である。

僕は、南部と西野と絡むくらいで特に他のクラスメイトと仲良くしようとは思わなかった。

南部と西野も同様だったみたいで、一週間で僕ら三人はクラスから浮きまくっている。

一週間の観察とマックでの話から、南部の人と成りと、“何故どう見てもヤンキーです。

ほんとありがとございました”な西野が桜花高校に通っているかがわかった。

南部は、近いからと言つ至極単純な理由で高校を選んだみたいだ。授業中も大抵読書をしていて、先生の話は全く聞いていない。

にもかかわらず、あてられるとスグに答える。教師たちもこれには困っているみたいだ。

それだけじゃなく、南部のやつは、フランス語も多少なら喋れるらしい。

僕は、正直どこのエリートだよ、なんて考えてしまう。

けど、運動の方はあまり出来ないみたいなので昔から本の虫だったんじゃないかと勝手に想像している。

西野は、どうやらある人と約束をしてこの学校を受けることとなっ  
たらしい。

そのために随分<sup>ずいぶん</sup>必死に勉強したみたいだ。

約束を守るために自分の学力以上の高校を受けて受かる西野をちょっとカッコイイと思う。

僕は、特に何かに熱中することが出来ていない気がするから。

そんなことを考えてるうちに四時間目のチャイムがなった。

「じゃあ、今日の授業はここまでにしましょうかね。」

「起立、礼、着席。」

老教師のセリフの後に火野さんが挨拶をして午前の授業は終わった。

僕は、いつものように二人の元に向かう。

「飯食いに行こうぜ。」

「おう、行こうか。」

「っしや、メシだメシ。」

僕の誘いに対し、普通に答える南部と、若干食い気が出ている西野。西野は中学のとき、学校に給食を食べに来ていると公言していた。食欲旺盛な感じである。

こうして三人は、今日も食堂に向かうのだった。

#### 第四話 事のはじまり4

桜花高校の食堂は、運動場の隣にありかなり広い。

また、よほどの数が来ない限り、座れないことはない。

メニューは、パスタにカレー・丼もの・日替わり定食・うどん・そば等一般的なものはだいたい置いてある。

券売機で、先に食券を購入しておく、それぞれのコーナーに並ぶと言うシステムだ。

そのため券売機は、結構人が並んでいる。

僕と南部は、券売機に並び、西野はパン売り場の方に向かった。

パンは、直接購入のため券売機に並ぶ必要はない。

僕は日替わり定食、南部は、天ぷらうどんを注文し、早々とパンを買い終わって座っている西野の所へ向かった。

「またせて悪い、西野。」

「一夜に悠介もおせーぞ。早くメシ食おうぜ、メシ。」

「ワリい。そだな。」

早くお昼が食べたくてならない様子の西野は、僕らの謝罪よりも食いが勝っているようだ。

三人で昼食を食べていると、さっさと食べ終わった西野は、部活の話をしはじめた。

「二人とも、部活決めた？」

「僕は、まだだね・・・あんまり入る気もないかな。南部は？」

「俺も、まあ入っても文科系だろうしな...軽音なら入るかも。西野は、どうなん？」

「俺はなんてか、無理なんじゃねーの？」

僕は、もとよりめんどくさがりなので入る気はない。

南部は、ギターが引けるみたいなので、バンドを組める環境を得た  
いようだ。

西野は見た目が金髪リーゼントなので、入れてもらえるとは思って  
ないらしい。

見た目気にするなら止めればいいのにと思うのだが・・・

本人は今のところ気に入っているらしく

しばらくは髪型を変えるつもりはないようだった。

そうこうしているうちに南部も、うどんを食べ終わった。

元々小食らしいのだが、彼は食堂でご飯を食べるとき八割型うどん  
で済ませている。

残りの二割はラーメンだ。彼はラーメンが好きらしい。

それはさておき、うどんの最大のメリットは、何より安いことだ。

そんなに食費を削ってまで欲しいのものがあるのかと思った僕は、

南部に問うてみた。

「南部はさ、大体うどんだけど、腹いっぱいになるの？」

あと、何か欲しいものもあるの？」

「まあ、前に言ったと思うけど小食だから腹は割と平気だね。ん  
と、本とギター機材かね。結構機材高いし。」

南部の話に西野は若干興味を示したらしく、突っ込んだ質問をしだ  
した。

「悠介、ギター何使ってるの？あと、アンプとシールドは？」

「ん、ギターはムスタング。アンプはオレンジ、シールドはジョー  
ジだね。西野も楽器やってんの？」

「やってないぜ。兄貴がベースやってるから、ちょっと話出来る位結構良いの使ってんじゃん。」  
「ギターは、貰いものだね。あとは、ちょっと金貯めりゃ何とかなるしさ。」

二人の会話に僕は完全に置いていかれていた。

ムスタングが、フェンダー社のギターだとか、オレンジというアンブ作っている会社があるとか

ジョージエルスなんてシールドメーカーがあるなんて、この頃の僕には知る由もなかつた。

僕にとつて、ムスタングはフォードの作ったマスタングって車だと思つたし、

オレンジは果物だと思つた。さすがにジョージは人の名前だと思つたが、シールドを盾だと思つたのだった。

完全に会話に付いて行けなくなつた僕は、黙々と日替わり定食を食べることとなつた。

その間も二人は音楽の話をしていたが・・・

僕が食べ終わつた頃には、二人はかなり意気投合しているようだった。

僕は音楽を聴くのは好きだが、演奏にはさほど興味もなかつたので、昼休みがまだ30分ほど残っているのを確認し、話し込んで居る二人に別れを告げ食堂を出た。

食堂を出ると、運動場で元気に遊んでいる生徒が結構いる。

彼らはサッカーをしているみたいだ。

僕は、さほど興味はなかつたが、何の気なしに運動場を眺めていた。

すると、日差しが気持ちよく僕はもっと日に当たりたいなと考え、屋上が開放されているのを思い出したので、屋上に向かうことにした。

#### 第四話 事のはじまり4（後書き）

作中の用語についての補足

簡単な補足です。ほんとに簡単なんで突っ込んだことを聞かれると困ります。

フエンダー：ギターメーカー。ギブソンと並びギターメーカーの最  
大手。

オレンジ：ギターアンプメーカー。オレンジ色のアンプで有名。

シールド：楽器とアンプを繋ぐもの…要はケーブル。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8230f/>

---

気がつけば生徒会役員？

2010年10月17日14時04分発行